

人間関係論構築に関する考察

—『人間関係』誌を中心にして—

酒井 玲子

目次

- 第1章 「体験学習」導入の経緯
- 第2章 南山短期大学・人間関係科の開設
- 第3章 人間関係研究センターの設立と人間関係論の構築
- 第4章 人間関係・集団教育論の考察

問題の所在

一人間関係論について

人間のあり様全体の解明はかつて哲学や宗教の領域であったが、自然科学や生命科学の発達に伴ってこの手法を人間の成長や発達に当てはめた心理学、それを社会的側面から探る社会学、そして人間全体の成長発達を学習と教育を基軸に分析する応用科学としての教育学等が生み出されていった。

昨今、人間関係論(原論)や人間関係学、対人関係研究という名称がとみに聞かれる。これら人間関係の在り様に関する学問は、主として言語学からの異文化コミュニケーション論や、自己(自分)と他者関係、そして、医療や看護、福祉や教育等を学校、地域、そして国際社会の視点からアプローチをする等、広域、かつ多岐に渡っている。そして、それらの研究は社会心理学的方法から対人関係の実際的処遇、グループ・ダイナミックス等、コミュニケーションスキルの開発が多いのも特徴である⁽¹⁾。

それは人間の諸活動を基軸に人間の関係が在り、個人の社会的営みの必要から、技術化と理論化の必要に迫られているという背景がある。なかでも社会的スキルトレーニングとその研究が急速に展開されているが、これは大坊郁夫が指摘するように、「現代における対人関係の脆弱⁽²⁾」もその誘因と考えられる。

わが北星学園大学は2002年度に文学部に心理・応用コミュニケーション学科を開設したのも極めて今日の課題と関わる問題意識から出発していた。

情報機器の驚異的な進歩が生活スタイルを変貌させ、その利便さが格段と進んだ反面、これによって人間間の対話による心情的な触れ合いの減少が家庭や学校、地域社会においてさまざまな禍根を呈した。まさしく意思疎通の脆弱さが人間対人間の間に歪みをもたらしている事実は否定できない。

ここでは情報機器の導入は時代の要請でもあるという前提を確認しつつ、まずもって人間性の回復を試みる人間関係やグループ・集団の人間関係を実践的に理論化する必要性があると考えられる。

そのような視点から本稿では、第一に、南山短期大学人間関係科・同大学人文学部心理人間学科の教育実践と同短大と大学の「人間関係研究センター」の長年にわたる先進的な実践的研究を取りあげて考察したい。その際、同センター発行の研究紀要『人間関係』誌を中心に、その人間関係理論を追ってみたい。

キーワード：人間関係、体験学習、Tグループ

「人間関係研究センター」では、その総合的な視野からの人間関係論の構築が試みられているのだが、まずは体験学習、狭く言えば「Tグループ」(Training Group)導入の背景から眺めたい。それによって、改めて人間(対人)関係とは何か、人間関係は訓練によって培われるのか、それが可能だとすれば、その方法とは何か、等を考察してみたい。

第1章 「体験学習」導入の経緯

第1節 「体験学習」の歴史 一概観一

1) 南山短期大学人間関係科のカリキュラムに導入された「体験学習」、特に「Tグループ」の歴史は20世紀初頭、現代心理学の祖となったゲシュタルト心理学派の研究にまで遡る。

その系譜を辿ると、その学派のレヴィン(K. Lewin)がユダヤ人迫害を逃れて渡米し、1935年、グループ・ダイナミクス理論を発表する。彼はその後の1945年、MITにグループ・ダイナミクス研究所を創設した。

かくしてレヴィン等はこの理論をアップライド・グループダイナミクス(応用集団力動学)と名付け、アクション・リサーチ、ヴィーハーヴィラル・サイエンス(行動科学)等の名で当時の社会状況に対応する行動科学論を構築している。また、その理論を彼は、人種的偏見の除去を目的としたソーシャルワーカーの教育訓練に導入したのである。

レヴィンの後継者は体験学習の方法を発展させて社会福祉の実践にグループ討議、ロールプレイ、データの相互認識、スタッフ研修等を導入した。この点、全米教育協会傘下のNTL(National Training Laboratory)もすでに、「Tグループ」という集団トレーニングの実践にとり組んでいたのである。

2) 一方、アメリカ心理臨床家であり、クライアント中心療法の提唱者であるカール・ロジャーズ(C. R. Rogers)はレヴィン等の

グループ討議方式をカウンセラーワークショップにも活用している。事実、ロジャーズ自身、NTLと関係し、Tグループをエンカウンター・グループ(Encounter Group)と呼ぶ心理療法に発展させている。

確かにロジャーズの文献には、このTグループの討議方式を見出す事ができる。1985年の彼の論文「もっと人間的な人間科学に向けて」において、ヒューマニステック心理学は非実験室の研究が唱導され、体験学習(experiential learning)、集中的グループ体験(intensive group)の手法が重視されている。彼は従来の心理学の中心にあった感覚、知覚、動機づけ等、精神の部分的研究に代わり、ヒューマニステック心理学が「生きている、行動している全体的人間」を対象としたが故に、人間を変える力となり、ひいてはアメリカ文化に多大な影響を与えたと指摘している。

伝統的、科学的な操作や実証、実験による心理学に挑戦し、それに代わる新しい研究法を編み出したロジャーズ等の共通のスタンスは、「建物や実験室」に代わり、体験による「主として学習過程」に重心を置くのである⁽⁵⁾。

このTグループを中心とする体験学習は、エンカウンター・グループの他、センシティブィティ・トレーニング、ヒューマン・リレーションズ、インテンシティブ・グループ・エクスぺリエンス、オルガニゼーション・ディベロップメント等の用語で、社会の様々な領域に導入されて行くのである。

この経緯を考察するために、坂口順治の講演記録に添付されていた「Tグループの歴史的発展過程」を図1に載せて置きたい。

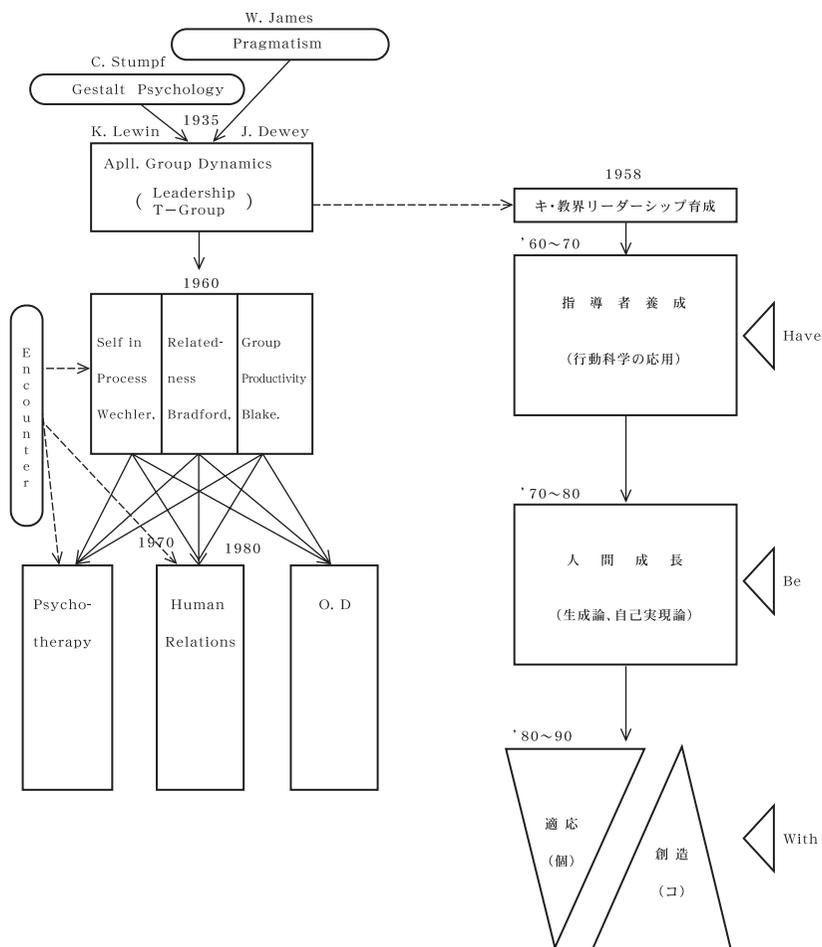


図1 Tグループの歴史的発展過程

第2章 わが国への導入の事情

第1節 教会集団生活指導者研修会

1) 1958年8月6日から13日まで「第14回世界基督教教育大会」が東京で開催されたが、この大会は日本のプロテスタント各教派が一致して取り組んだものであった。⁽⁷⁾

この大会後に開催された「第1回教会集団生活指導者研修会」(Laboratory on the Church and Group Life)において「体験学習」が導入された。つまり、大会後の7月21~8月1日の期間に山梨県清里町の清里寮において研修会が開催されたのである。⁽⁸⁾ 米国聖公会、カナダ合同教会の10名の指導者を中心に、日本側からはプロテスタント各教派から35名が参

加した。以下はこの第1回の様子である。⁽⁹⁾

この研修会の目的は、グループ・ライフに影響をおよぼす諸要因、諸力を探求する、実験的特殊状況下で、これらの諸力に対してよりセンシティブになり、教会内のリーダーとして創造的・応答的な内的態度の育成が目指されている。つまり最初は、教会の集団生活でのリーダーシップ養成の研修であったことが分かる。

このラボラトリーの特徴は大体次のように要約してみた。

- (1) 集団生活というフィールド・領域での知識を取り扱う。
- (2) “文化的孤島”, “人工的”であり、日常生活から離れたところで行われる。

- (3) 集団生活はこの中で生み出された素材を取り扱い、メンバーが作り出すグループ・ライフである。
- (4) (グループ内での)自らの行動の向上を目指している。この目的を達成するために種々デザインされた内容、方法の組み合わせが提供される。参加者の行う主体的体験学習は、経験、反省、表象、秩序によって深められる。

この研修会の構成要素は礼拝、理論セッション(Th)、トレーニング・グループ(T)、プラクティス・グループ(P)、自由時間、夕べの音楽や詩の朗読等である。リラックスした雰囲気でのミーティング、関心あるテーマで集まるインタレスト・グループも設けた。その他、「反応票」、「評価」のための「面接」等、盛り沢山のプログラムがあった。

この第1回の研修会の主要な内容は表1⁽¹⁰⁾にみるように、Tグループ11回、理論セッション12回、Pグループ8回が設定されているが、これは「体験」、「理論」、「スキル」の3本柱からなっている。それらは以下のようにして実施されたのである。

トレーニング・グループ (Tグループ)
メンバーの相互認知と「ここ」での出

来事の、フィードバックによる共有である。その過程によって新しい事象が生み出されるのである。

理論セッションでは「グループの要求」、「メンバーの機能」、「司会者のスタイル」、「リーダーシップ」、「コミュニケーションの障害」、「権威と権威主義の問題」、「集団圧力と集団基準」、「ネガティビティ」、「逸脱者の問題」、「社会変革」、「グループの発展段階」等がテーマとなっている。

プラクティス・グループは、Tグループと異なるメンバー構成により、グループ観察、ロールプレイ、司会者のスタイル、変革技法等、生活現場で活用できるスキル訓練である。

全体として、この第1回目の研修会の特徴を中堀仁四郎は次のように述べている。グループでの感受性、行動能力、スキル訓練によって、「組織を民主的かつ効果性のあるものにする変革体 - チェンジ・エージェント - をそだてることを目的とし、グループの社会的・心理学的側面を強調したところにあった⁽¹¹⁾」。

第2回目以降についても中堀は『人間関係』(第2・3合併号 1985)において同名の論文

表1 第1回教会集団生活指導者研修会日程表 (1958・7・21-8・1) 清泉寮

	7月21日	22日	23日	24日	25日	26日(土)	27日(日)	28日	29日	30日	31日	1日
午前(1)		T ₁	T ₂	T ₃	T ₄	T ₅		T ₆	T ₇	T ₈	T ₉	T ₁₀
午前(2)		Th ₁ M.I.T.	Th ₂ プロセスとコンテンツ	Th ₃ チェアマンのスタイル	Th ₄ シェアードリーダーシップ	Th ₅ メンバーの機能		Th ₆ コミュニケーションの障害	Th ₇ 集団圧力と集団基準	Th ₈ ネガティビティ	Th ₉ 社会的変革	Th ₁₀ グループの発展段階
午後		P ₁ 観察	P ₂ ロールプレイ	P ₃ チェアマンのスタイル	P ₄ 大集団への参加の問題			P ₅ 観察機能	P ₆ 集団決定		P ₇ 持って帰るもの	T ₁₁ まとめ PLR
夜	開会 オリエンテーション	「教会の使命」		インタレストグループ			P ₈ 「参加」 P ₄ の全体発表会	Th ₁₁ 権威と権威主義		Th ₁₂ 逸脱者の問題	インタレストグループ参加者の夕べ	閉会

を発表している。

第2節 JICE（立教大学）の設立

1) さて、立教大学のスタッフであった R.A. メリットの論文「JICE キリスト教教育の冒険」には副題として、- 立教大学キリスト教教育研究所の設立の際して - とある。⁽¹²⁾ 「JICE」とは、“Japan Insutitute of Christian Education of St. Paul's (Rikkyou) University”の略称で、この論文は1962(昭和37)年、研究所の開設を機に記したものである。まず彼は「教会集団生活研修会」の思想や意義を述べているが、その様子は上述の中掘論文通りなのでここでは省く。

2) この研究所の成り立ちについてであるが、1960年の第2回の研修会と関わっている。その際、米国聖公会教育局長ハンター (D. R. Hunter) が提案し、1, 2回の研修会参加のスタッフが体系的な、継続的実験や研究を実施し、それが動力となって立教大学の研究所が設立されたという。

教会教育活動に新しいアイデアとアプローチを導入するという方針は、ラボラトリー(実験的特殊状況)の体験であった。それによって集団におよぼす諸要因、力を探求するのである。「ラボラトリーは、これらの諸力が発生し、観察され、建設的また創造的に処理され得るように特に設定されている」⁽¹³⁾。その際に、グループ・ダイナミクスという社会心理学に基づく行動科学の方法が適用されたわけである。

ここでは、神との生ける関係が、また、人間との会おう場であり、こうしたラボラトリー体験と研究は「神学的決断の革新に貢献する」⁽¹⁴⁾ものと説明されている。

2) それでは、「JICE」の理論研究を『JICE シリーズ Nos 1, 2 & 3』から見てみたい。

No. 1の論文：柳原光『ラボラトリー方式による人間関係訓練』

論文：坂口順治『グループ・トレーニング』
No. 2の論文：官本吉「関係の神学」(日曜説教「甦りの宗教としてのキリスト教」)

No. 3の論文：「リーダーシップ」に関する諸論 G. L. リピット、坂口順治、志知朝江、R. L. ハウによるものが掲載。

第3章 南山短期大学人間関係科の設立

第1節 人間関係科のスタート

1) 以上の経過から、南山短期大学の人間関係科は、立教大学キリスト教教育研究所(JICE)の行動科学的・学際的教育機関の方法を基礎に設立された。当時、科のスタッフは「JICE」の研修を義務付けられたという。そのようにして、多大な影響を受けながら南山短期大学は他大学に先駆けて1973年に人間関係科を発足させているのである。

「設置要項」にはその目的を「人間性のキリスト教的な理解を基礎とし人間行動諸科学の研究を通じて人間行動および人間関係の在り方とその過程の理解を深めることによって、集団や組織や社会の中で機能的生産的に行動し得る資質を養うとともに各種の人間関係における援助的役割を果たす能力、態度を形成すること」⁽¹⁵⁾とある。

さらに「人間関係学科」とせず、「人間関係科」とした意味(補足説明)については、短大であるという前提に立ち、学問を究めるというよりも実践の技能的側面に力点が置いたこと、人間関係を単に社会的事象として客観的・理論的に研究するよりも自己の主體的な体験を通して学ぶこと、にあったという。

2) 設立5年が経過した1979年に、この科の長期計画と以下のようなカリキュラムの「各要素」が打ち出されている。

思想・理念・根本思想は、「対話的人間」と表現される。

学習理論は、「学習者中心の学習」、具体的には「体験学習」である。

養成されるスキルは、「関係づくり」と「変革のスキル」である。

実践面で学生に期待されるものは、「問題意識をもって、主体的に、今ここに生きる」ことと「愛をもって人間を受容する態度」である。

実践・体験を中心にしたこの人間関係論は、見るように、「対話の人間」の形成である。この「対話」を軸に古今東西の哲学や思想が取り込まれて教育活動が展開された。

第2節 設立10年間のカリキュラム

1) 人間関係科の紀要『人間関係』第2・3号合併号(1985)には、特集として「南山短期大学人間関係科の10年」を掲載し、歴史を振り返っている。ここでは、骨子となる教科の内容・検討・課題、さらに学生の「学びの軌跡」として、在学中の個人の成長や卒業生の追跡調査を載せているのが興味を引く。

人間関係科設立当初と比較するとカリキュラムの名称等に多少の変更があるものの、その柱は変わっていない⁽¹⁷⁾。キリスト教概論、人間関係概論、人間関係基礎論、人間関係研究法、人間関係各論、人間関係総合実習(合宿)、人間関係実験演習(卒業研究)がほぼ踏襲されているのである。

2) 以下は、学科のカリキュラム上の特徴をまとめたものである。

キリスト教概論、は短大共通の科目とされ、神の愛に応答する人間の理解、すなわち「関係の神学」の探求が目標とされた。これは生きる、キリスト教的世界観、人間の尊厳等宗教的メッセージの概説(R.ハウ著『対話の奇跡』採用)、さらに体験的方法によって展開された。この概論では他科目と連携し、知識と体験のバランスを保つことの必要性が指摘されている。

人間関係概論A、Bは、授業案内に「人間関係の研究の成果と研究法についての

導入、または総括であって、個人、集団、組織、社会における人間の行動ならびにその背景に関する諸アプローチも概観する⁽¹⁸⁾」ことになっていた。そのためAが合宿や集中講義形式で行われ、人間関係理論の講義やグループ討議が実施されている。

人間関係基礎論(哲学的基礎、同演習)は2年間の履修科目である。人間関係科設立時には、生物学的、社会学的な人間行動の理解と哲学的・宗教的な人間理解がビジョンとされていた。ここでは人間のあるべき姿、人格の尊厳性、人間の連帯性について体験学習によって学び、生活に生かすのである。そのようにして年を負うごとに「モラル」、「対話」、「愛」、「生きる」等をテーマにし、ゼミ形式で問題の究明をはかっている。

フランクルの『死と愛』、ブーバーの『対話』、ソクラテスの『パイドン』、マルセルの『行為と人格についての所見』や『私と他者』、岩崎武雄の『倫理学』等がテキストにされている。

これらの比較的難解なテキストの使用によって、人間と人間関係の倫理的、哲学的な理解(未消化も多い)と真理探究の喜びの感得が目指されている。この展望では、「キリスト教的なもの、宗教的なもの、また超越の問題や絶対的な存在である神の問題」を取り上げる事、その上で、個人研究グループ、ゼミナール方式導入やティームティ・チングのための人的配慮、基礎論、等との統合的学習が課題とされている。

基礎論「心理学的基礎」では、個人の行動の感覚、知覚、認知、学習、思考、感情、動機、価値観、人格、適応等、心理学の基礎、発達段階(幼児から老人)の差異研究、援助関係(しつけ、指導、カウンセリング)の心理的原理の研究である。それを、やはり知識のみならず実際の人間関係から学ぼう、というものである。そのために年5、6回の合宿・

集中体験学習方式が取り入れている。これを見ると、学生のエネルギーを引き出すためにスタッフの心血がいかにか注がれているかを感じさせられるのである。

その後、SD法、面接法等の心理学実習や小グループでの課題研究も取り入れ、基礎論は更なる各論へと発展していった。

3) 基礎論 (社会学的基礎) は、対人関係の諸問題や社会的相互作用の主要な方法である。その中にはロールプレーやソシオドラマ、Tグループ等の実践がある一方、社会化やグループ・プロセスの講義、社会調査を実施した。

山口真人は初め、アカデミックでないことに批判的で、もっと「社会心理学といえる水準に近づけることを目指⁽²⁰⁾」していた。

しかし、後には次のように表現している。「人間が社会からどのような影響をうけたかだけを問う“社会化”の概念にとらわれずに、人間が他者や環境との相互影響関係の中で共同世界を主体的に作り上げていく存在であることを実感できると同時に、自分から他者に働きかけて“会う(対話する)”ことや自分についてフィードバックをもらうことを体験できる授業が、人間関係の基礎論としてよりふさわしいと思ったのである⁽²¹⁾」。そのように気づくに至るのである。

このような「気づき」はTグループの参加

者のみならず、主催者や研究者もまた然りであったのである。そのようにして山口は社会的な問題と人々との関わり、生き様の理解を研究する意味を問う方向へと転換していく。それは、観察者から世界に関わる者への転換であり、以後、学生に個人と世界との関係によって形成されていく「自己形成史」などに組み込んでいる。

4) この基礎論、と、とその連携や結合が学科のカリキュラム上、重要な働きをしているように窺える。特にとは1980、81年の8、9期生からは合同の授業展開である。両者に取り入れたフィールドワークを中心とした授業に切り替えたのである。その上、10期生からは、とに「人間関係研究法」も加えて、表2のような内容にしている⁽²²⁾。

その後、は「自己世界の探求」、が「共同世界の探求」が目指されている。

特徴的なのは、山口にみるようなこれまでの心理学者の「科学研究」からの変容、決別である。それは「つまり人や事象を全く切り離し(対象化)、対象から受ける影響を最小限にして冷静にデータ集めや観察を行う(主観性を排除する)方法、とは正反対⁽²³⁾」の方向であった。これは、南山短大スタッフたちの方法論としても違和感がないように見受けられるが、従来の実験心理学者にとっては一大方向転換だったはずである。

表2

	基礎論 II	基礎論 III
前期	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解 (実習を含む) 自己啓発 (実習を含む) 	<ul style="list-style-type: none"> ヒューマンドキュメント法による人間理解 (取材活動を含む) 調査法による社会と人間の理解 (アクションリサーチの試みを含む)
後期	<ul style="list-style-type: none"> 自己形成 (生活史作りを含む) 自己表現 (芸術表現を含む) 	<ul style="list-style-type: none"> 会議 (ミーティング) の理解と実践 (実習を含む) リーダーシップの理解と実践 (実習を含む)

そのためのカリキュラムとして、「関わりを通して理解する能力」と「関わりながら変革する能力」の修得のために、フィールドワークのプログラム化が痛感させられていくのである。

5) に挙げた人間関係研究法⁽²⁴⁾ は心理テスト、カウンセリングの分析、社会調査法等、実習とグループ・ディスカッションの実施である。ここでは、面接法を習得してフィールドワークとしての「わたしの自己形成史」を作成させ、基礎論⁽²⁵⁾ と関連させている。

の人間関係各論は2年生の選択科目で、「家族」、「組織・集団」、「文化」- マスコミュニケーション-、「教育」は「援助法」の領域から選択することになっている。

の人間関係総合実習はこの人間関係科の特色の一つで、合宿によるTグループを含むラボラトリーメソッド等、体験学習である。オリエンテーション 生活合宿 Tグループ ワークショップ 卒業合宿と連動する2年間の人間関係トレーニングである。

の人間関係実験演習 は、これまでの学習の統合としての卒業研究である。実験演習1(実践法)と(研究法)の基礎の上にとってグループで課題をアクション・リサーチする。その後は、卒業研究のテーマの選定、その動機づけ、また「卒論」に縛られない自由な研究のあり方が課題とされている。

由な研究のあり方が課題とされている。

6) 1989年に至って、これまでのカリキュラムを大幅に改定する作業に取り組んだ。これについては、第9号「人間関係原論を中心に詳細に述べられている⁽²⁴⁾。それは上述の10年の総括とその後数年を経て、その反省や課題を踏まえた改定であったという。

その特徴は各論を独立させ、4つのエッセンスをまとめて「人間関係原論」を新設したことにある。

そこでは字義通りでは「人間関係についての根本的・原理的な理論⁽²⁵⁾」を取り扱うが、これまでの既成概念との狭間で試行錯誤の末、作成されたのが図2の「人間関係原論の2年間⁽²⁶⁾」である。

そこには人間関係を学んで、人間関係に生きるという連続的目標と内容が描かれている。この「人間関係原論」のその後の展開は、『人間関係』の第14号(1996)に特集として詳細に報告されている。

第4章 「人間関係研究センターの設立」と人間関係論の構築

第1節 研究センターの設立

1) 南山短期大学の人間関係科設立当初か

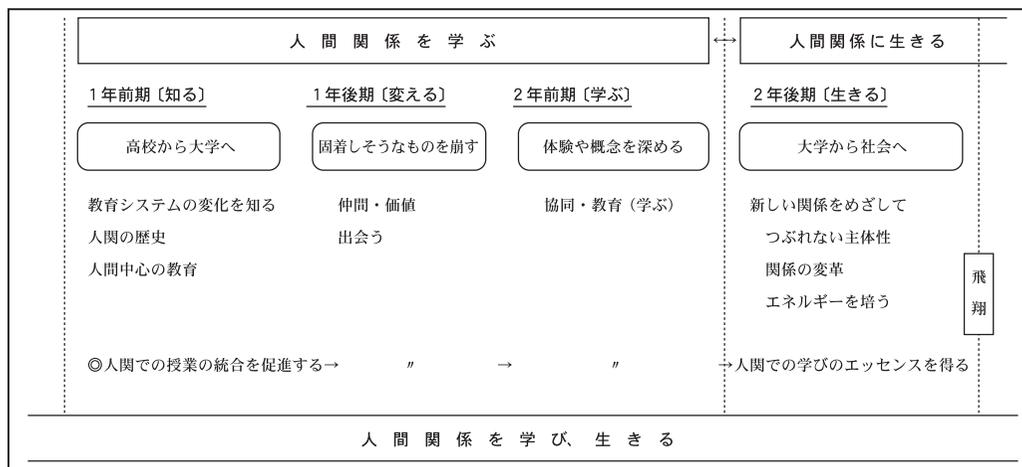


図2 人間関係原論の2年間('89~'90年度の予定)

ら研究センターの設置が志向されていたが、その設立の2年前、1975年に理事会宛てに出された文書「人間関係のアクション・トレーニング・リサーチ・センター (Human Relations Action-Training-Research Center) を南山学園に設置するすすめ」には次のような構想が掲げられている⁽²⁷⁾。

1. 教育の人間化 (Humanization) と社会の改善・変革
2. アクション・リサーチ
3. 歴史的展望
4. 学際的・国際的であること

さて、1977年に設立されたセンターの目的と事業計画は次のようである2条。

センターはキリスト教の人間観に立って、広く学際的・行動科学的に人間・人間関係の研究及び研修を行う事を目的とする3条。

1. 人間・人間関係に関する研究と教育の推進
2. センターと目的を共通する学外研究機関との協力
3. 地域社会における開かれた大学としての諸機能を果たすために研究会・研修会等の開催及び個別的相談・指導・援助等
4. 研究成果の刊行ならびに文献・資料の収集と一般への公開
5. その他、センターの目的達成のために必要と認められる事業⁽²⁸⁾

その事業・活動として、社会人向けの公開講座や研修会も開いてきた。その内容は多岐に渡り、一般社会人のみならず、企業、教育・福祉・医療機関との関わりを持ち、広く地域社会に向かって実践活動を展開してきている。また、研究会の開催や研究紀要『人間関係』の発行等によって、理論研究も積み上げ、その深化を諮ってきた。

2) 伊藤雅子はこの研究センターの活動は第一に、研究開発機能、第二に、教育研修機能、第三に、コミュニティ形成機能があると

みいる⁽²⁹⁾。そうであるとすれば研究センターの歩みは、設立当初の目的に沿うものであったと言えよう。

2000年を機に南山短期大学人間関係科は南山大学人文学部心理人間学科へと改組した。『人間関係』誌も『Human Relations人間関係研究』と装いを改めたが、アクション・リサーチを中心に据えたこれまでの30年のわたる研究・研修活動は連綿と継承されている。

研究センターは設立当初の趣旨であった時代の要請にこたえつつ、上記、構想の1.にある「教育の人間化と社会の改善・変革」の実践はその成果を検証している。また、その真価が問われる段階にきたといえる。

第2節「対話的人間」論の探求

1) さて、人間関係論の検証についてであるが、「まず体験」をモットーに実践してきたスタッフが10年の模索を振り返る。体験は経験であり、実践であるとする。その体験学習がいかに学問として成立させるか、スタッフの試行錯誤が続けられていくのである。

その一端として、河津雄介による「学習者を中心にすえた教育のあり方をめぐって」の講演の開催とその後のスタッフの質疑・討論に苦闘の遍歴が窺える⁽³⁰⁾。

ここで河津は、社会心理学のリーダーシップ論から発して学生の教育現場へ、さらにアメリカの合流教育へと研究を進めた経緯を述べている。知的、感情的、意志的活動の総体学習活動が自己実現に導き、アフェクティブテクニックの工夫が実戦的パワーを生み出した自己体験を語っている。

だが、彼の実践は教育運動であり、教育理論や発達論が欠落していることへの自己疑問として起こる。その後、シュタイナー教育(人間の存在の意味を問う)と合流教育との共通点に到達、等々。

興味深いのはその後のスタッフの討論である。山口が人間関係科の教育の見直しを提言

し、グラバアは合流教育からシュタイナー教育への遍歴に共感している。

2) 以下、要約だが、次のような興味深い発言を取り上げておきたい。⁽³¹⁾

大庭：人間関係科設立時について、吉川、メリット、柳原、澤田の会談で「体験学習」は「やってみなければわからないもの」の発言等がなされた。

グラバア：体験学習では諸技法を用いて、学生の「今」を生き生きさせている。その種蒔きの部分から、将来の成長を育てる援助に関わりたい。

津村：ヒュー・マニステック・エジュケーションに認知的な発達理論がある。認知的なものとはアフェクティブ（情意的）なものとを分けること自体問題である。

山口：人間関係科は自分の生き方を明確にし、人間の尊厳を重んじる社会を作っていく態度を育てること。理論問題を論じるのではなく、そういう生き方ができる人間を育てるという目標である。

大庭：技術的・社会的な教育学、心理学を水平の線、哲学・宗教的な人間観を垂直の線でやっていく。つまり、人間関係の哲学理論の確立が課題と思いつつも、若い先生に任せてしまった。（一般の）大学が一方通行の授業なので、今、曲がり角にきている。体験学習を重視する必要がある。

河津：教師と学生が離れてしまった時に体験学習の力がある。一緒に動いてみると精神が動き、強い力が出る。

星野：14年間でそれなりの実績は作ってきた。それが必ずしも社会的に高い評価を受けらる事ばかりでないとでも。

竹内：シュタイナーの思想とドイツの神秘主義とはつながりがある。その神秘思想はナチスと全然無縁ではない。一つの価値に向けてカリキュラムを組むことは絶対にしない。

第2節 対話の哲学

1) このように人間関係論のあり方について河津批判も含めて、彷彿とした議論がなされている。その後、『人間関係』誌において数多くの論述が展開されていくのである。

その一つは、宮本圭による M. ブーバーの『我と汝』、『対話』“Zweisprache” (1932) 論である。ところでNTLもブーバーの『対話』論をその理論の一つにしていた。

宮本は「対話的生」を、そして翌年には「対話的教育 - M. ブーバーの教育論をめぐって -」を論じている。前著で宮本は、ブーバーの「いのち」を軸に、「対話とは単なる伝達や了解の手段ではなく、人間は根本的に対話的存在であること、対話的に生きることこそが人間の生の意味を確証する道⁽³¹⁾」であり、その究極に「永遠の汝」すなわち「神との対話」がある、と説明した。⁽³²⁾

また、宮本はブーバーの「教育論」から、宣伝と教育の相違、教育における「我 汝」と「我 - それ」との相違を、その帰結を「対話的教育」にあるとした。そこでは、ドグマではなく、「精神を啓発して彼らが真理を発見し獲得」し、強制、効率、利用の「死んだ関係」ではなく、自由、成長、応答の「生きた関係」の実現を唱えている。真の教育は「いのちの対話」であり、対話的教育は、自己の全生命を賭して応答する「偉大なる性格」の形成を目的とし、その共同教育者である教師自身の生き方を問うものであるという。⁽³³⁾

2) 以下、『人間関係』誌は理論の特集組んでいる。

創刊号：Tグループ

2, 3合併号：人間教育における体験学習

4号：自己表現

5号：グループの中に生きる

6号：対話

7号：Tグループ再考

8号：生涯教育の実際

9号：からだ

10号：人間教育の核心 - 学ぶこと・変わる
こと

11号：自己実現

12号：愛

13号：いのち

14号：「人間関係原論」

15号：大学における人間性教育の試み

16号：体験学習の実際とヴィジョン

17号：共にある

(2000年版研究紀要は未発行)

2001：人間関係研究センターのこれまでと
これから

上記の紀要中、第9号所収「鼎談」・「祈るからだ」の対話は特に奥が深い。ここでは、ギリシャ哲学からインドや日本の仏教に触れながら「肉」をめぐって「霊 - 魂 - からだ」の関係論が語られている。ここには人間を内・外側全体的に把握して見ようとした哲学がある。

3) また、佐伯胖の「内側からみる」の講演記録にも注目したい。

彼は、道具 (もの) と人間の関係、人間 (I) と人間 (YOU) との関係が相互に関係している点を説明する。知識や言語はその YOU へ関わる中で共有され、人間と人間の在りよう (関係性) が世界に広がる媒体になる意味が指摘されている。

発達心理学のベースは、私とあなたとが本当の関係が出来る事、それが第一の社会性であり、認識の発達には社会性 (Socialization) の発達である。また、その YOU 的な関係をコアにして THEY 的な文化、世界へと重荷を負っていく、これが第二の社会性である、と説いた。

一方、第17号では、「PARADIGM COMMUNICATION の提言」と題して、まどか庸代が重厚な一文を載せている。

それはパラダイム = 「価値の枠組み」を原点とした自己と他者理解に迫まる。そして、宗教と科学、宇宙と地球、多民族や多世代、

男女、公私、理系文系という相対立する「価値の枠組み」の理解とともに、その「価値の転換」と「平和共存」を説いている⁽³⁶⁾。

第4章 人間関係学の考察

第1節 これまでの理論について

1) 南山短期大学人間関係科はその約30年間の試行錯誤によって、他に比類のない人間関係論を築き上げてきた。その努力は、アメリカ社会心理学や心理療法を拠り処として、自己、他者、対人関係、人間関係のTグループを中心にした体験的実践の検証によって、一つの人間関係論(学)を構築したといえる。

その人間関係論をキリスト教の人間観や哲学的なアプローチによって解明する努力が重ねられてきた。そこから掘り起こし、現代の教育課題に迫るためにフィールドワークを実施し、人間関係を体得させる教育方法論を導入したのである。

また、教師、指導者トレーナー、ファシリテーターの役割に論及している。

第7号においては中掘が、「Tグループの倫理」を述べている。特にラボラトリーにおけるトレーナーの倫理的役割を図表にして細密に記している⁽³⁷⁾。また、同誌では「Tグループと霊性教育」⁽³⁸⁾をまどか康代が説いている。彼女はTグループの基礎には内在する神という発想があると指摘する。これは実にシュタイナー的な発想と推察される。「神性の内在」という思考があればこそ、連綿と長時間にわたる発言を中心とするTグループの方法の説明がつくのである。

これらの熟考された理論の構築は、第一に教育課程の中に表されてきた。年間を通して相当な日数の体験学習を学生に対して課し、その分析によって人間関係論を構築してきた経緯がある。

だが、それでもなお、特定のトレーニングによって人間関係力は向上し得るか、人間に

対する感覚はどのようにして培われるのか、つまり、この方法による意識と行動の変革の問題が提起されているように考える。その試みは、今なお、その問いを抱えつつ、実践的に検証し、さらなる人間関係論構築というプロセスを辿っているよううかがえる。

2) さて、先のブーバーは、「教育関係は純然たる対話的關係⁽³⁹⁾」であり、この世への信頼が教育関係の最も内的な成果である、と述べた。ナチス抬頭を時代背景として、また彼の民族的スタンスから言っても異文化との対話論は急務であったに違いない。だが、これらの対話論や教育論が時代や社会を超えて共感されたからこそ、NTLや南山短期大学・大学のスタッフによって人間関係論に導入されたのであろう。そしてまた、このブーバー教育論には古典教育学者のペスタロッチーやフレーベル、シュタイナーらの人間論や教育観の文脈上にあるといっても過言ではない。

3) さて、P. アリエスは「子ども期」（という表象、認識）は近代社会へのプロセスで大人との関係によって発見された事実であることを立証して見せた⁽⁴⁰⁾。また、古典教育学者らは人間形成上における子ども期の特異性を明らかにして、人間関係、集団による教育の重視を訴えた。

ボヘミアのコメニウスの学校は、普遍的な知識や技法の伝授とともに、子ども間における相互模倣の人間教育の場として構想されたのであった。この学校集団は近代市民社会の形成を担う人間の基礎となるべく考案されたのである⁽⁴¹⁾。

なかでも19世紀の教育学者フレーベル (F. Fröbel) はその著『人間の教育』において、人生最初の「微笑⁽⁴²⁾」が周囲の人間（第一には母親）との交わりによって内側から表出されると述べた。彼の主張では人間の教育は内面（神性）への覚醒過程であり、神・人一致を核にして、時代精神である国家的統一と人類の一致・和合へと進むというのである。カ

イルハウ学園 (Keilhau Anstalt) や Kindergarten は人間の成長・発達上、幼少期からの人間関係を必要するという、彼の集団教育論を実践する場であった。

4) レヴィンとの関連が指摘されるアメリカ心理学者のデューイ (Jhon Dwey) は、この点どうだろうか。先の坂口の研究によれば、このレヴィンの理論はジェームズ (W. James) やデューイ等のプラグマティズムと共通の思想的基盤にあるという⁽⁴³⁾。

確かにレヴィンは対人関係や社会集団について、デューイと共通の心理学上の関心事を抱いていた。デューイが学校を「小社会」と称して、体験的な実験室教育の構想を記した『学校と社会』がレヴィンの体験学習理論に何らかの影響を与えたことは大いに考えられる。具体的にはレヴィンとデューイが同じテーマの心理学実験をしているそうだが⁽⁴⁴⁾、しかし、両者の具体的な接点は明らかではない。

わが国では戦後、「経験」「体験」「生活」の重視によってもはやされたデューイの教育論は、後には「這い回る経験主義」や「系統的学習の希薄」と批判され、急速に顧みられなくなっていった。

しかし、昨今、デューイ教育論の再考が進められている。

それによれば、デューイのいう経験教育とは生活の実体験ではなく、問題解決学習という極めて知的な探求である。彼の著『学校と社会』でいう小社会としての学校は、人間共同体を意味している。いわゆる学校は言葉や道具の使用によって思考し、探求する人と人とのコミュニケーションの共同体であった。この点、先の佐伯の道具と人間との係わりと人間と人間の関係の在り様、それによる世界の広がりという論は、デューイの学校（共同の小社会）の内実、すなわち知的探求と反省的思考と共通するものがあると考えられる。そして、南山大学スタッフの体験学習の実践もその線上にあるといえよう。

第2節 再び「体験学習」について

最後に体験学習の点から幾つかの課題を挙げてみたい。

1) Tグループという「文化的孤島」の場面設定においては、繰り返し長時間のグループ・デスカッションが実施される。その結果、自分と他者、そこでもし出された雰囲気や会話の内容、成り行きについて、自ら気づかされるものがある。そこでは、教育は内面の変化のプロセスであり、自らの学びが重要、という意味では論拠がある。また、内容の教えではなく、学びの方法が重視されるのも然るべきである。

ところが、そこでの「気づき」が参加者の知的探求や理論化作業に発展するのだろうか、という疑問は残る。「振り返り」作業は応々にして、そのグループを構成する個々人の一時の感覚的把握の結果といえるのである。

グループ・ダイナミックスの手法はその場での会話の傾向を示唆しているのに過ぎない。その会話やかもし出される雰囲気等の内容については意味づけが必要なのではないか。

「今、ここ」のプロセスを重視するあまり、コンテンツが希薄になって系統性のある知的探求の作業がおろそかなりかねない。Tグループ実施後、トレーナー（ファシリテーター）からのグループ・ダイナミックスの図式による討論の整理や何らかのミニ・レクチャ - も多少はあるが、話された内容についての過小評価を感じずにはおられないのである。

2) また、仮説 - 体験 - 指摘 - 分析 - 再仮説のプロセスを辿りつつ、行動力の活発化、感受性の訓練と思考力の深化、応用力を伸張、更なる高い仮説へと到達するには、優れてトレーナーのコミュニケーション力が問われている。

最後に、以下の意見も付しておきたい。

- ・ 今日の人間関係の希薄さの主たる原因の解明が必要ではないか。
- ・ 対話的人間論（人間関係論）の構築にあ

たって、哲学、心理学からのアプローチを中心にした研究が多いが、人間（関係性）の発達の筋道等、教育学的アプローチが必要ではないか。

おわりに

以上、南山短期大学・大学のカリキュラムを中心に概観してきたが、その30年にわたる実践と研究の蓄積は驚愕するばかりである。奥が深く、心理学辞典を引きつつ、ドイツやアメリカの心理学史を紐解くことにもなった。本稿は人間関係論や体験学習に「触れた」程度のものでしかない。拙速な理解と判断になりかねないことを危惧するが、とにかくこれらを考察する機会を得たことは成果の一步であろう。まさしく人間関係の研究は緒にいたばかりなので、今後も中堀仁四郎氏などの援助を受けつつ、更なる研究を進めたい。

改めて、これに取り掛かろうとした動機が本学の「心理・応用コミュニケーション学科」新設の他に、以下の出会いがあったことを付しておきたい。

- 1) 2003年7月「第14回北海道のヒューマン・インタラクション・ラボラトリー」の研修会に参加したこと
- 2) 北星学園大学「グループ・コミュニケーション」の授業を担当し、須田明夫氏の援助で「体験学習」を展開してみたこと。

最後に付加えれば奇遇なことに、かつて、「体験学習」導入の動機となった「第十四回基督教教育世界大会」（1958）に参加していたのである。

（これは2003年度特別研究費の補助による研究である）

[注]

- (1) [ヒューマンサーヴィスに関わる人のための人間関係学] (徳田克巳 文化書房博文社 2003) など。
- (2) (大坊郁夫「社会的スキル・トレーニングの方法的序説 - 適応的な対人関係の構築 - 」『Japanese Journal of Interpersonal and Social Psychology 対人社会心理学研究』 Number 3 大阪大学大学院人間科学研究科退陣社会心理学研究室 2003 p.1
- (3) ライツツヒ大学のヴィルヘルム・ヴントらに対し、ベルリンを拠点とした自由な学風であった。カール・シュトゥンプフがベルリン大学で「クワッセルストリップ」(馬鹿者がわいわいがやがや言う)(談笑する)方法でグシュタルト心理学の祖を作った。後にヴェルトハイマー、ケーラー、コフカ、レヴィンも加わった。上記の記述や[体験学習]導入の経緯は、『人間関係』(第7号 1989)の坂口順治の講演に詳しい。
- (4) カーシェンバウム他編 伊東・村山監訳『ロジャース選集(下)』誠信書房 2001 p. 27
- (5) 同上 p.43
- (6) 坂口順治「体験学習とキリスト教教育 - Tグループ・アプローチを中心して - 」『人間関係』 7号 1989 p.6
- (7) 坂口によれば、日本で最初のTグループの導入は九州大学で(牛島義友)で、その後東京大学(水原泰介、杉溪一言、中村陽吉)や東京ガスにおいて「ベセル方式」を取り入れて実践していたという。『人間関係』 第7号 1989 p.2~3
- (8) 『第十四回基督教教育世界大会の記録』が日本基督教協議会から1959年に発行されている。
- (9) この研修会の内容については、中堀仁四郎「JICEラボラトリー・トレーニングの歴史」『人間関係』(創刊号 1989)とメリット(R. A. Meritt)の「JICEキリスト教教育の冒険」立教大学『キリスト教学』(第4号 1962)を使用したものである。
- (10) 以下、(『人間関係』創刊号に掲載された中堀仁四郎の研究論文によるものである。「JICEラボラトリー・トレーニングの変遷」(その1) 1984 p.11~35
なお、中堀論文では「教会集団生活指導者研修会」の名称が1~4回までで、5回以降は「教会生活研修会」と簡素化されている。だが『JICEシリーズ』(No.1・2&3)によれば、後者の名称は3回からである。p.20~25
- (11) 中堀仁四郎、前掲論文 p.16
- (12) メリットの「前掲論文」の文末には「立教大学キリスト教教育研究所規則」が添付されている。『キリスト教学』 第4号 1962 p.14~15
- (13) R. A. メリット 同上 p.3
- (14) R. A. メリット 同上 p.7
- (15) 同上 p.13
- (16) 星野欣生「南山短期大学人間関係科の教育の根拠 - 10年の歴史と展望」『人間関係』 第2, 3合併号 1985 p.40
- (17) 同上の『人間関係』誌には星野欣生作成の「一年次の授業の流れ」(1981年度)(p.83)と「二年次の授業の流れ」(p.123)の細密なカリキュラム一覧表と担当者、授業内容が載せられている。
- (18) 柳原光 同上 p.91
- (19) 会沢俊三 同上 p.99
- (20) 山口真人 同上 p.107~108
- (21) 同上 p.108
- (22) この表2は、『人間関係』 同上 p.112
- (23) 山口真人 p.113
- (24) 竹内敏晴他「授業記録」『人間関係』 第9号 p.107~145
- (25) 中野清「人間の原典を目指して」『人間関係』 第9号 p.109
- (26) この図2は『人間関係』誌の9号に載せられている。p.110
- (27) 南山短期大学が大学に改組した2000年には『人間関係』は出版されず、翌年大学の『心理人間学科』と改称し、研究起用も『Human

- Relation 人間関係の研究』となった。2001
p.10～11
- (28) 大橋嘉男「人間教育科教育が試みたこと」
『Human Relations 人間関係研究』2001 p.4
- (29) 伊藤雅子「南山短期大学人間関係科研究センター20年の歩み」 同上 p.14
- (30) 『人間関係』第5号 1987 p.2～44
- (31) 宮本圭「対話的生」『人間関係』(6号1988)
p.49～55
- (32) これらは、マルチン・ブーバー(Martin Buber)
田口義弘訳『「我と汝」・「対話」』(みすず書房
1978) によっている。『永遠の汝』の説明p.155
- (33) 宮本圭「対話的教育 - M. ブーバーの教育論を
めぐって - 『人間関係』 第7号 1989
p.89～97
なお、ブーバーの『教育論』は『ブーバー
著作集8』(1970) にあり、みすず書房から
出版されている。
- (34) 竹内敏晴・大森正樹・中野清「鼎談・祈るか
らだ」『人間関係』第9号 1991 p.1～52
- (35) 佐伯胖「内側からみる」『人間関係』第9号
1991 p.61～76
- (36) まどか康代「PARADAGIM COMMUNIKATION
の提言 - 価値観レベルでのコミュニケーション - 20世紀の人間関係科終焉と共にあって」
『人間関係』第17号 1999 p.41～52
- (37) 中堀仁四郎「Tグループの倫理」『人間関係』
第7号 1989 p.46～47
- (38) まどか康代「Tグループと霊性教育」 同上
p.49～57
- (39) 前傾『ブーバー著作集8』p.30
- (40) アリエス (Philippe Ariès) 杉山光信・恵美子
訳『<子ども>の誕生』1980 みすず書房
- (41) コメニウス (Y. A. Comenius) 鈴木秀勇訳
『大教授学』1.2 1962 明治図書
- (42) F. フレーベル, 岩崎次男訳『人間の教育』
1 p.10 1964 明治図書
- (43) 坂口順治「体験教育とキリスト教教育」前掲
書 p.3
- (44) 同上
- [参考文献・資料]
- 立教大学キリスト教教育研究所「J I C E 通信」
第1～15号 1963～1967
- 南山短期大学・南山大学人間関係研究所センター
『人間関係』(1976～2000年) “Human Relations”
南山大学同研究センター (2001)
- 南山短期大学人間関係科監修, 津村俊充, 山口真
人編『人間関係トレーニング』ナカニシヤ
出版 (1992)
- 星野欣生『人間関係づくりトレーニング』金子書
房 (2003)
- 行動科学実践研究会共著『Creative Human
Relations 人間関係トレーニング』全8巻
1996 プレストタイム
- 原岡一馬『人間の社会的形成と変容』編 (1993)
ナカニシヤ出版
- R. ブラウン, 黒川正流他訳『グループ・プロセ
ス』1993 北大路書房
- マルチン・ブーバー, 田口義弘訳『「我と汝」「対
話』』みすず書房 1978
- C. ロジャーズ・H. カーシェンバウム・V. R. ヘ
ンダ - ソン編, 伊東博・村山正治監訳『ロジャ
ーズ選集』(上)(下) 1989 誠信書房
- 氏原寛・村山正治編『ロジャーズ再考』2000
培風館
- 日本基督教協議会編『第十四回基督教教育世界大
会記録』1959
- 立教大学基督教教育研究所『J I C E シリーズ
Nos 1. 2 & 3』
- 山本眞理子・外山みどり編『社会的認知』1998
誠信書房
- 日本基督教協議会学校部グループ・ダイナミック
ス委員会編『第2回教会における集団生活指
導者研修会記録』1960
- 心理科学研究会『育ちあう乳幼児心理学』2000
有斐閣
- 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編 シリーズ学びと文
化『学びの誘い』1995 東京大学出版会

[Abstract]

Studies in the Establishment of Human Relations Theory: Focusing on the *Journal of Human Relations*

Reiko SAKAI

The current increase in Human Relations studies can be considered to be related to the advancement of today's information apparatuses, as well as to a lack of personal relations in daily life. Hokusei Gakuen University established a Department of Psychology and Applied Communication in the School of Humanities two years ago with such matters in mind.

This paper outlines the curriculum of Nanzan Junior College's Department of Human Relations, appearing in the *Journal of Human Relations*, a publication of the Center for the Study of Human Relations at Nanzan Junior College. It also examines the details of the establishment of Human Relations Theory at the Center.